

患者・地域を考え病院の在り方を追求

⑬東京女子医科大学八千代医療センター（千葉県八千代市）



45度の角度をつけた設計により、各病室から景色を眺められる入院棟

東京のベッドタウンとして人口が増加している千葉県八千代市。東京女子医科大学八千代医療センターは市の要望を受け、2006年、急性期医療に特化した地域の中核病院として開院した。

緑に囲まれた入院棟の外観はW型で、どの病室からも景色を眺めることができる。建物は免震構造で、景観を損なわないよう立体式にした駐車場も災害時に緊急医療施設に転用できる設計だ。

同センターは感染対策を重視して、外来棟の専用出入り口から感染症室に入れる構造にした。

外来棟1階受付では呼び出し機（PHS）が渡される。患者は呼び出しまでの間、医療関連の図書館「からだ情報館」や中庭に面したレストランなどで過ごすことができる。

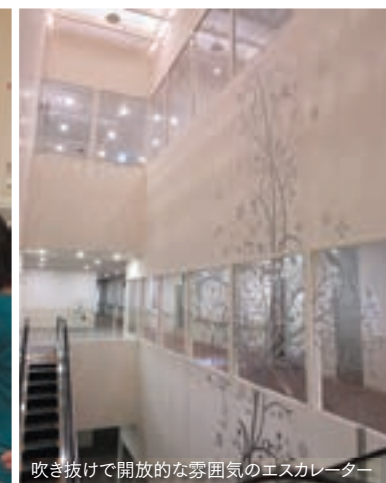
3階のリハビリテーション室の前にある「空中庭園」は、患者や家族の憩いの場であるだけではない。ミニ階段を活用しての歩行訓練や、箱庭で作業療法を行うことができる。

また、この階には、女性医師が対応する「女性科外来」もあり、女性患者から好評だという。

ユニバーサルデザインと省エネにも工夫がしてある。



「やちよ健康フェスタ」では小児病棟に「バルーンマン」が登場、子供たちの笑い声が響いた



吹き抜けて開放的な雰囲気のエスカレーター



院内のどこにいても患者と連絡が取れる呼び出し機



「空中庭園」ではミニ階段などを使ってリハビリもできる



森をイメージした小児科外来の待合室



八千代市の豊かな自然と大地の恵みを象徴した8匹のキャラクター「グリーンズ」。ICカードや職員の制服などに使われている

エスカレーターの天井部に大きなガラス窓を設けたことで、待合室などに柔らかな自然光が差し込んでいる。廊下には高低2段の手すりを据え付けたり、階段やトイレの照明をすべて感知式にしたりしている。

入院棟2階の中央手術室には、日本で初めて「スカイブームシステム」を導入した。手術中の安全を確保するため、医療機器、モニターを宙づりにし、床にはコード類がないようにした。

3階は千葉県に2つしかない総合周産期母子医療センターだ。切迫早産や合併症のある妊婦などのハイリスク出産に対応し、同県で最も多くの母体

搬送を受け入れている。

入院患者や面会者、職員には電子キーと電子マネーの機能を兼ね備えたICカードが配布される。売店やベッドサイド端末などへの支払いのキャッシュレス化は患者から好評のようだ。

同センターは健康意識の向上と地域との交流を目的に、07年から毎年夏と冬に「やちよ健康フェスタ」を開催。医師・看護師体験コーナー、小児病棟でのイベント、ミニコンサートなどを行っている。地元ではフェスタを楽しみにしている人もおり、開院4年ですでに地域にとけ込んでいた。